

芝浦工業大学工学マネジメント研究科客員教授  
谷口博昭

## 地域社会の再生へ、点から線の展開を

わが国は「みちの文化」といわれます。「みち」を通じモノが運ばれ、「みち」が交

う地域社会が形成されてきた者が休憩に立ち寄り「まち」との接点が出来、「まち」の情報を得、「まち」と交流し、

ことにより、沿線の諸活動を活性化し、地域社会の再生を期待するものであります。

高度経済成長期のモータリゼーションにより「自動車社会」となり、経済効率、速くその市に人が集まり定住し、集落を形成して「まち」へと

高度経済成長期のモータリゼーションにより「自動車社会」となり、経済効率、速くその市に人が集まり定住し、集落を形成して「まち」へと

過度に優先され「みちゆき」す。更に「防災の拠点」や「地断できる「公智（こうち）」

発展してきました。人が触れ合い交流し、情報や意見が交

が薄れ、地域社会が分断されつつあります。大きな変化の

方創生の拠点」に高める取り組みも進められています。

換されて文化が交わり、夫々の「まち」が発展するとともに

時代、「みちの文化」に相応しい地域社会の再生が求めら

「日本風景街道」は、こうした「道の駅」が有する多様な機能を「みち」沿線に適度

に人やモノが行き交う「みち」を軸に「向う三軒両隣」とい

「道の駅」は、自動車利用に付加、点から線へ展開する

望みたい。強く歩める「みちゆき」を